常照

第７９６号

お念仏をいただく人生

兼好法師の「徒然草」に「身死して財（たから）残るは智者のせざるところなり」とあります。「死後に財産を残したために争いの因（もと）になる事は智者のすることではない」とあります。

『大無量壽経』には、田があれば田があるで憂え、家があれば家があるで憂える。牛馬などの家畜類や、金銀、財宝、衣食、器物、果ては使用人に至るまで、あればあるで憂え悩む、とあります。人間は無くても悩み、また、あっても悩むものです。

生きている間に強欲であった老人のお話です。いちがいには言えないと思いますが、年をとると頑固になりがちです。そのうえ欲のかたまりのような年寄りは嫌われるでしょう。

あるところに、そんな老人がいて嫌われていました。その老人がある日突然、心臓発作で倒れました。家の者は内心よかった、と喜びました。だんだん容態が悪化して、二、三日もたたないうちに、アー、ウーとしかいわなくなりました。お医者さんに来てもらって診てもらいますと、「親爺さんは、もう時間の問題だ」といわれる。そこで親戚の者も集まって来て葬式の準備にとりかかりました。死亡通知のハガキの印刷も出来ました。お焼香の順番も決まりました。これで、いつ息を引きとってもよい、ということになりました。

ところが、その後、一週間たっても、十日たっても、一向に息を引きとる様子がない。結局、虫の息の切れぬまま火葬場に運んで焼くことになりました。それを聞いて葬儀屋さんは驚きました。息の根の切れぬ人を焼くなんて、そんなことは出来ないというのです。そこをなんとか、と拝みたおして、とうとう焼く

ことになりました。（恐ろしい……）

これは本当にあったことではありません。私が前に読んだ漫画に出ていた話です。なあんだ、といって笑われるでしょうが、しかし笑いすててよいものかと思うのです。私は漫画家の洞察力はスゴイと思うのです。というのは、人間は、実際には生きながら焼くことはしなくとも、時によると焼いてしまおうかというような恐ろしい事を考えかねないと思われるからです。

ある心理学者によると、どんな大事な者（親子、兄弟、夫婦など）でも、そのいずれかが大病か怪我などで寝込んだりすると、最初はいつまでも大事に看病しようと思っていても、実際には三カ月もたつと、もうここらで片付いてくれないかなぁ…と思う。人間というものはそんなものだ…というのです。

お念仏をいただいている私たちはどうでしょう。念仏者は今紹介したような場面に直面しますと、如来様が見ておられると

いって身をつつしむ、といったら笑う人がいるかもしれません。しかし、深く仏法を聞いた人は、そのような内観反省にたどりついて漸愧するのではないか。つまり世間の道徳を超えた倫理に立って自己批判をするのではないかと私は思うのです。

お念仏の日暮らしを心がけましょう。

五月の常例布教（ご法話）のご案内

○前期　五月七日（木）～十一日（月）
大阪教区 榎並組 信徳寺
講師　小西善憲師

○後期　五月十三日（水）～十六日（土）
熊本教区 玉関組 正元寺
講師　寺添和南師

○場所　小樽別院内

○時間　午後二時（法要終了後）～
午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話をして頂きます。どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に来院くださいますよう、お待ちしております。

発行所
〒047-0017
小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院
電話（〇一三四）二二一〇七四四番
FAX　二一九一四〇八〇番
テレホン法話　二七一一六一六番